

# JLTA Newsletter No. 47

## 日本語テスト学会

### The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 47 発行代表者: 渡部良典 2019年(令和元年)9月30日発行  
発行所: 日本語テスト学会 (JLTA) 事務局  
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1 順天堂大学さくらキャンパス  
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001(代表) FAX: 0476-98-1011(代表)  
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp URL: <http://jlta.ac>



\*\*\*\*\*

### 民間試験狂騒曲とある大学の混乱の物語

秋山 朝康 (文教大学)

「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉通り、ようやく暑さもおさまってきた。ただし、センター試験に代わって英語民間試験を活用することへの議論は一向に収まる気配はない。9月の報道では約7割の高校の校長と9割の高校教員が懸念を示し、6割の大学が問題ありと認識し、3割の大学がこれらの試験を採用するかどうか決めかねているとのアンケート結果が公表された。態度を保留している大学に早く決断せよと、どこからか催促があるらしい。

各大学は民間試験をどのように活用するか頭を悩ませている。試験を活用するのか？活用するならばどの試験を、どの程度利用するのか。大学全体で活用するのか？それとも特定の学部だけで利用するのか等々、とても大きな問題が山積している。

ある大学にこの問題に対処するために委員会ができた。この委員会は各学部の入試に関係する委員とその代表、統計や心理学、そして言語テストを専門とするものも加わったらしい。委員会の仕事は他大学の情報集めとその分析で、具体的には他の大学はどの民間試験を活用しどの試験がどれくらいの点数に換算されているかどうかの検討だったらしい。資料をよく眺めると、同じような民間試験を活用し、同じようなテストの点数換算の大学群が見えてくる。他大学の様子をお手並み拝見という感じであった。「赤信号みんなで渡れば怖くない。」とはよく言ったもので、公表した民間試験の活用計画は、偏差値が似ている大学はあまり変わらない結果だった。委員の人の話を聞くと、民間試験を取り入れることは始まる前からもう決まっていたとのこと。決めるのは各試験の点数をどれくらいとれば自学のテストに相当する点数になるのかどうかを検討することが主な仕事だったとのこと。委員会の一人は困惑して、データがないと決められないから、わからない、と述べた。またある委員からはそもそも各民間試験は同じ英語能力を測っているのか？高校生の英語を測るのに適切なテストかどうか？現時点で決められないことが多く検討したくても検討できないのでは、と本音を漏らした。この状況を信号に例えると、信号の色が赤か青か黄色か、なに色かがわからないけれど、お隣さんがやっているからうちもやらなくてはならない、ということであろうか。威力を発揮するはずだった Assessment literacy はどこへ？

話は主役の高校教師と生徒(受験生)に移る。多くの生徒はおそらく教師の指導・指示されたとおりに試験を受けるであろう。各民間試験をよく吟味して受験生に合った適切な受験指導をする、というような悠長な時間

はない。試験対策となりうる教材を提供してくれる民間会社、そして受験生が何回か試した民間試験に誘導されながら、一方、教師は試験で生徒が少しでも点数がとれるような授業をするであろう。服で例えるなら既製品に受験者の体を合わせていくような感じであろうか。少しくらい袖が合わなくても、色とか選んでいる余裕はない、服がだぶだぶでもまづは着なさい。服を着たらだんだんと体が馴染んでくるから心配はない。生徒も教師もこの問題で振り回されている。みんながわからないまま改革の波にのまれていく。

「まずは進むしかない。他の道はない。」これからどんなことが起こるかさえ予想もつかないことに対して不安で困惑しながらも準備をしている。生徒が登らなければならない山がそこにあるから。

英語教育の時計の振り子は昔からどちらかに大きく振れ過ぎる傾向がある。以前は文法重視に振られて、今はコミュニケーション重視の方向に振れている。この試験改革の流れで振り子が振れ過ぎて、いっそうこの混迷を深めなければいけないのであるのだが。日本の受験生に適した 4 技能を測る試験を作成し実施するために英知はたくさん存在するのに。

**Report on the 49th JLTA  
Research Seminar  
July. 20 (Sat)**

**中央大学**

**題目：「R による成績データ  
分析入門」**

**報告者 齋藤 英敏（茨城大学）**

第 49 回例会は「R による成績データ分析入門」と題して、日本大学の小林雄一郎氏を講師に迎えワークショップを行った。小林氏は R に関する著作も多く、コーパス分析を専門としている方である。参加者はほぼ定員の 40 名弱で、R に対する興味関心の高さが伺えた。ほとんどの参加者は、触ったことがある程度という自己申告をしていた。かく言う私もその一人であり、研究で何度かいじった経験はあるが、使わないとこの手のコマンド系のプログラムはすぐ忘れてしまう。実はしばらく触っていない恐怖から脱する機会が欲しくて、今回の参加を決めた。R の講習に参加するのは初めてだった。

内容は、初めはダウンロードから入り、四則演算という本当の基礎の基礎から、ベクトルや行列の入力、記述統計、箱ひげ図、幹葉図などの基本的な図の描き方を習い、練習問題などを通して基本を身につけた。後半はもっと大規模の実テストデータを用いて、より複雑な図の描き方、基本の推定統計まで行った。基本的なコマンドは全て配布されたパワーポイントファイルにあり、ほとんどの人が誤入力することなくできていたと思う。より高度な図の追加パッケージの紹介もあり、試してみようという気になり翌日やってみた。R の利点の一つは、氏も発言されていたが、図を描くときに様々なカスタマイズが可能であることである。SPSS などではこのようにはいかない。自分でコマンドを入力してみることで、この利点が本当によく理解できた。

全体として、時折入る氏のジョークもあって、リラックスした雰囲気でも和やかに R の基本が学べた充実したワークショップであった。私自身、今回参加できたおかげで、また R を触る気になった。やはり、一人でマニュアルを見ながら悶々とするより、人から教わった方がいいということを改めて感じた午後のひとときであった。

**海外の学会・研究会  
参加報告  
World Conference Reports**

**The 2018 AALA Conference  
報告者 横内 裕一郎（弘前大学）**

大会名：The 5th Annual International  
Conference of the Asian Association for  
Language Assessment  
開催日：2018年10月18～20日  
テーマ：Standards in Language Assessment  
開催地：Regal Shanghai East Asia Hotel

筆者は2017年に台湾で開催されたAALAにも参加しているが、この学会の特に優れた点は、Pre-conference workshopが充実していることだと感じている。昨年は4つのワークショップが開催され、講師はいずれも第一線級の研究者で、事前に選ぶのが正直悩ましいほどであった。その中で、最終的にはGu and Evaniniによる“Automated feedback on spoken and written language production”に参加し、最新の自動採点システムについて学んできた。このワークショップでは、自動採点に関する最新の研究が紹介されただけでなく、ETSのCriterionやGoogle DocsのAdd-onとして開発されたWriting Mentorを実際に使用しながらどのようなフィードバックが与えられるかを体感することができた。

Conference day 1の午前中はKeynote speech→Plenary speech 1→Plenary speech 2と大ホールに全参加者が集まり、大会テーマに関する講演を聞くこととなった。いずれの発表も大会テーマに沿った発表になっており、これまでに

学んだことのあるような話もあれば、新鮮な話も多くあり、3つの公演全てがとてもわかり易いものだった。

1日目午後～2日目午前のParallel Paper Sessionも質の高い発表が多くなされており、前半は特に大会テーマに沿った発表が多くあった。実は筆者は大会1日目の昼過ぎのタイミングで腹痛を発症し、ホテルの自室に籠もってしまい、多くの発表を聞けずまいとなってしまった。それ自体は非常に残念だったが、学会会場と宿泊先が同じ場合には体調が優れない時や、別の仕事をこなさなければならない時に部屋に戻る利点があるのだと妙に感心してしまった。脱線した話をもとに戻すが、第5回AALAの開催地が上海であったことからか、海外の大学院に在籍している中国人大学院生の発表が多かったと感じている。将来、日本で国際学会がある際に（もちろんJLTAの研究大会にも）、海外で活躍している大学院生が積極的に参加してくださるようであれば、この分野がより発展すると感じている。また、この学会は大学院生間のやりとりが活発で、実際にGraduate Student Networking Lunchとして公式に大学院生が関わる場を設けていることとStudent Committeeがあることで、学生が学会運営の経験を積む機会があることは学会としての人材育成、という観点で非常に有用なものと感じた。JLTAの規模ではなかなか難しいが、参考にすることが多い学会だと強く感じている。

書評  
Book Reviews

***Handbook of second language  
assessment***

**Dina Tsagari & Jayanti Banerjee  
(Eds.) (2017). *Handbook of Second  
Language Assessment*, Walter de  
Gruyter.**

本書は第二言語の測定についての様々な側面について述べたもので、De Gruyter Mouton Handbooks of Applied Linguistics シリーズの第 12 巻である。

本書は 4 つの部から構成されている。第 1 部は第二言語測定の基礎的な概念について書かれている。例えば、測定の目的、standard と framework、norm-referenced と criterion-referenced assessment、質的要素、言語測定の与える影響などである。

第 2 部では第二言語の各技能と領域の測定を扱っている。読む、聞く、書く、話すの 4 技能の測定と、語用、異文化、流暢性、翻訳と通訳技能についての章がある。

第 3 部は色々な場面における第二言語測定について、教育現場、職場、移住移民における言語測定について述べられている。

第 4 部は第二言語測定における諸問題についてまとめられている。standard と framework の問題、技術革新と AI の問題、子どもの言語能力の測定の問題、障害を持つ学習者の評価の問題、ライティングにおける voice の問題、教師のアセスメントリテラシーの問題も述べられている。

ここでは特にバトラー後藤裕子によって書かれた第 4 部の第 22 章 (pp. 359-375) の *Assessing young learners* について述べたいと思う。筆者によれば、young learners というのは 5 歳から 12 歳の日本のちようど小学生の年頃の児童を指す。この章では彼女は、児童を対象とした英語能力の測定の在り方について、特別に配慮すべき点があり、大人とは大きく違った問題があると指摘している。

第一に、年齢、発達段階に関する問題などである。児童はまだ、認知的、社会認知的、言語的そして情意的側面でも発達段階の途中にある。認知的な発達は十代半ばまで急激な変化を伴って訪れる。記憶容量も大人に比べると 3 分の 1 ほどであり、学習においても測定においても配慮が必要である。

メタ認知能力もちようど児童の時期に発達し、また、社会認知的能力やコミュニケーション能力もちようど身につけていく時期であるから、例えばインタビューテストなどを行うにあたって例えば面接官が誰であるのかが大きく影響する。

そして、大人に比べると背景知識が不足し、複数の情報を統合して考えることも不得手とする傾向があるため、トピックやタスクの影響も受けやすい。

さらに、児童ならではの学習の中心性 (centrality) についても注意するべきであるという。児童は自分と他者との違いがまだ明確でないため、自分を客観視することや、自分とは違う考え方・気持ちの存在を理解するのが難しい。自分も経験したことがあるが、彼らにとって有意味な作業でない、ポカンとしてしまつてうまく取り組めないことがある。

この他にも communicative competence の定義や、CEFR の再考について、そして academic language の影響についても述べている。

以上の事柄から、バトラーは児童を対象として測定を行う際にはそのテストタスクや形式に工夫や配慮が必要であるとしている。児童が理解出来、親し

みやすいトピックを用いれば、インタビューテストでも多くの発話を引き出すことができるだろうし、大人向けの形式や用語を考えなしに使うと、タスクを誤解してしまったり、理解できずに無回答に終わってしまったりするかもしれない。

そしてその結果に非常に傷つきやすいのも児童の特徴である。読み進める中で、最も印象に残ったのは、児童の脆さ(vulnerability)である。バトラーは、児童は授業やテストでの失敗から簡単に学習意欲をなくしてしまうと述べ、裏付ける研究も挙げている。どのような形式ならより児童にふさわしいか、どのようなトピックや問いにすれば公平で理解しやすいか、綿密に計画し測定を行う必要がある。そしてこれらを軽視することは「英語嫌い」を増やしてしまうことにもなりかねない。

この章でバトラーは、児童を対象とした測定は慎重に行われるべきであると一貫して述べている。日本の小学校でも英語が必修化され、来年度から正式な科目として評価を行わなければならない。この章に書かれている内容は、子どもたちの英語能力をいかに評価すべきか悩む教師たちに大変参考になるものだと思う。

以上、第 22 章を中心に述べたが、本書は他の章も選りすぐりの著者による洞察の深いものばかりでテーマも幅広くカバーされている。まさに手元に置きたい一冊である。

評者 土平 泰子 (聖徳大学)

**JLTA 事務局より連絡**  
**Messages from JLTA Secretariat**

JLTA の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

(1) 9月11日(水)・12日(木)に**JLTA 第22回全国研究大会**が新潟青陵大学で開催されました。全国研究大会実行委員長の木村哲夫先生をはじめ、藤田智子先生(研究会運営委員会委員長)、印南洋先生、金子恵美子先生、熊澤孝昭先生、田中洋也先生、谷誠司先生には実行委員としてご尽力いただきました。改めて感謝の意を表したいと思います。

**次年度の大会**は、2020年秋に広島大学で開催されます。最新の情報はJLTAのホームページ(<http://jlta.ac/>)をご覧ください。

(2) 2019年7月20日(土)に**第49回日本言語テスト学会研究例会**が中央大学で開催され、活発な議論がなされました。

(3) 2019年10月19日(土)には、**第50回日本言語テスト学会研究例会**が、常葉大学で開催されます。どうぞご参加ください。

【日時】2019年10月19日(土) 午後1時から午後5時まで

【場所】常葉大学静岡草薙キャンパス A棟3階 A306教室

【テーマ】日本語教育を取り巻く現況と外国人労働者への日本語テスト

【概要】入国管理法の改正により新たな在留資格「特定技能」が新設され、「特定技能」では「技能水準」と「日本語能力水準」の試験が課せられるようになりました。これらの新しい試験と政策との関係や外国人就労者・求職者向けのテスト開発の取り組みなどについてお話を伺います。

【共催】常葉大学外国語学部

【日程】

受付開始：12:30

趣旨説明・講演者紹介：13:00～13:10

坂本勝信（常葉大学）

講演：13:10～15:10 神吉宇一

（武蔵野大学・日本語教育学会副会長）

「入国管理法の改正と外国人の日本語能力評価」

休憩：15:10～15:30

事例発表：15:30～16:00

内山夕輝（浜松国際交流協会）

「浜松国際交流協会の浜松版日本語コミュニケーション能力評価システムにおける就労者・求職者向けテストについて（開発の背景、開発に向けての発想などを中心に）」

調査発表：16:00～16:30

谷誠司（常葉大学）

「特定技能に係る試験の現状調査」

フロアーを交えてのディスカッション：16:30～17:00

坂本勝信（常葉大学・司会進行）

閉会行事：17:00～17:05 閉会の辞 中村洋一（清泉女学院短期大学・JLTA 副会長）

【参加費】 会員、常葉大学卒業生および学生は無料。それ以外の方は 500 円。

【申し込み】 参加を希望される方は、10 月 12 日（土）までに下記の申し込みフォームにてお

申し込みください。（定員 60 名）  
<https://forms.gle/5BCcFK6Fp8m5kJKv8>

事前参加申し込みされていない場合は、当日空きがあればご参加いただけます。

【問い合わせ先】 谷誠司（常葉大学）  
taniseiji@sz.tokoha-u.ac.jp

今後の最新の例会情報は、以下をご参照ください（[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=21](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=21)）。

(4) 『日本言語テスト学会誌』第 22 号が近々発行され、お手元に届く予定です。学会誌の論文等は、J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>) にて同時期に一般公開されます。

(5) 『日本言語テスト学会誌』は、狭義のテストングに関するものだけでなく、広く評価に関する論文を募集しています。教育実践やプログラム評価に関するものなど、評価全般に関わる実験・知見を含みますので、どうぞふるってご応募ください。

(6) 日本言語テスト学会では、2019 年度より「オンライン投稿審査システム」を導入しました。このシステムは、2014 年度から学会業務の一部を委託してきた国際文献社が持つもので、投稿と査読の過程がオンライン上に記録されます。さらに、学会誌の一層の質の向上を目指して、既に出版された論文のデータベースを使った投稿論文の剽窃の確認や、著者による論文の匿名化の再確認もシステムの中で行うことができます。国際誌ではこのようなシステムは一般的ですが、国内誌では一部にとどまり、慣れていただくのにお手間を頂戴いたしますが、どう

ご理解の程よろしくお願いたします。**2020年度**の投稿可能期間は4月7日～5月7日です。

最新情報は以下へ：[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=62](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62)

- (7) **JLTA 研修講師派遣事業**が2017年度から始まりました。本事業は、テスト利用・作成に関わる研修を行う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うものです。2019年度は申込みが1件あり、他に検討中という情報も入っています。講師リストの更新を近いうちに行う予定です。また、国立大学等の会合で本制度の紹介を積極的に行っています。会員の皆様におかれましては、言語テストにご興味のある方々へご周知くださいますようお願いいたします。

ウェブサイト：<http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

(8) **J-STAGE**

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>) における『日本語テスト学会誌』の**アクセス状況**（2018年10月～2019年7月）について報告します。資料トップへのアクセス数は5202件（昨年：3913件）、PDFへの直接アクセスは5727件（昨年：3337件）と大幅に増加しています。

国別アクセス数はアメリカからのアクセスが圧倒的に多く、日本国内からのアクセスも増加傾向にあります。上位の国に変動はありませんが、10位にベトナムが入ってきました。これはAALAの開催がベトナムで行われるからと推察できます。

ダウンロード先

2016～2017/7			
	国名	書誌事項	PDF
1	米	1555	1037
2	中	808	891
3	日	363	620
4	英	97	30
5	仏	54	4
6	独	38	27
7	蘭	22	9
8	韓	13	38
9	伊蘭	6	35
10	印尼	3	20

2017/10～2018/7			
	国名	書誌事項	PDF
1	中	1269	1019
2	日	932	1067
3	米	883	604
4	奥	148	46
5	韓	112	21
6	仏	100	21
7	露	64	10
8	独	46	20
9	英	45	39
10	比	42	47

2018/11～2019/7			
	国名	書誌事項	PDF
1	米	2392	2366
2	日	1176	1467
3	中	830	191
4	独	231	200
5	仏	140	22
6	英	80	84
7	露	64	83
8	奥	59	39
9	韓	55	33
10	越	54	60

- (9) 本学会ウェブサイトには、Web 公開委員会が公開を進めてくださった、**チュートリアルとワークショップ・ビデオ**があります。今年度も更新がなされましたので、どうぞご活用ください。

#### WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

##### チュートリアル (Tutorial, 日本語)

- ・「よい」テストの条件 (What is a 'good' test?: validity, reliability, and practicality)
- ・テストの構成概念 (The concept of test constructs)
- ・テスト細目 (Test Specification)
- ・リーディングテスト (Testing Reading-6 basic test formats-)
- ・リスニングテスト (Testing Listening)
- ・ライティングテスト (Testing Writing)
- ・スピーキングテスト (Testing Speaking)
- ・語彙・文法テスト (Testing Vocabulary & Grammar)
- ・測定の標準誤差 (Standard Errors of Measurement)
- ・効果量とは？ (What is the 'Effect Size'?)
- ・学習に役立つテスト結果の報告 (Test result reporting to enhance learning)
- ・古典的テスト理論 (Classical Test Theory)
- ・確認的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis)
- ・メタ分析 (Meta-Analysis)
- ・質的方法 (Qualitative Methods)

##### ワークショップ・ビデオ (主に日本語)

###### 2014

- ・Workshop 1 – CAT の基本的な考え方 (スライド)
- ・Workshop 2 – J-CAT (スライド 1, スライド 2, スライド 3)

###### 2015

- ・Workshop 1 – テストデータ分析入門 (in English)
- ・Workshop 2-1 – 生徒の力を伸ばす定期テストの作り方—妥当性と信頼性に留意して (スライド)
- ・Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (スライド)

###### 2016

- ・Workshop 1-1 初めて学ぶ効果量—入門編 (スライド)
- ・Workshop 1-2 初めて学ぶ効果量—理論編 (スライド)
- ・Workshop 1-3 初めて学ぶ効果量—実践編 (スライド)

###### 2017

- ・Workshop – テキストマイニングを使った自由記述式アンケートの分析

###### 2019

- ・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用 (前半)
- ・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用 (後半)
- ・配布資料

(10) 9月12日の総会にて、以下が承認されました。

1. 2018年度活動報告(案)
2. 2019年度活動計画(案)
3. 2018年度決算報告(案)
4. 2019年度予算(案)
5. 学会会則改訂(案)
6. 2020-2021年度役員・委員名簿(案)
7. その他、日本語テスト学会著作賞規程(案)、委員会報告等

学会会則については、2020年4月1日に改訂・施行されます。詳細については、事務局より届く総会資料をご参照ください。

(11) その他

- 会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>) 」はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>)。マイページ内の会員向けページにおいて、ジャーナル・ニュースレター等の掲載があります。
- 所属や書類発送先など登録情報にご変更がある場合、マイページでの登録情報の変更を3月末までお願いいたします。学生会員の方には、毎年学生証のコピーをご提出いただいています。
- 2018・2019年度の会費振込について、これからの方は早急によりしくお願いいたします。2018年度分のお支払いがない場合には、2020年4月より送付物の発送や電子メールの配信がなくなり、マイページの使用もできなくなります。
- 本会の退会を希望される方は、事務局

(jlta-post@bunken.co.jp) へご連絡をお願いいたします。

文責：

JLTA 事務局長 小泉利恵 (順天堂大学)  
JLTA 事務局次長 片桐一彦 (専修大学)  
横内裕一郎 (弘前大学)  
深澤真 (琉球大学)

日本語テスト学会 (JLTA) 公式

Twitter アカウント: @JLTA\_official

[https://twitter.com/JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)

### Messages from the Secretariat

We are thankful for your support of and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you may have. Please see our English website for more details:

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=599](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=599)

(1) **The 22nd Annual Conference** of the Japan Language Testing Association was held at Niigata Seiryō University on September 11 and 12 (Wednesday and Thursday). We would like to express our sincere appreciation to the members of the Annual Conference Executive Committee: Tetsuo KIMURA (Conference Chair), Tomoko FUJITA (Committee Chair), Yo IN'NAMI, Emiko KANEKO, Takaaki KUMAZAWA, Hiroya TANAKA, and Seiji TANI for their support.

**Next year's conference** will be held at Hiroshima University in

autumn 2020. The latest information can be found at <http://jlta.ac/>

(2) **The 49th JLTA Research Meeting** was held at Chuo University on July 20 (Saturday), at which there was a lively discussion.

(3) The 50th JLTA Research Meeting will be held at Tokoha University on October 19 (Saturday).

Please see [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=21](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=21) for details.

(4) **The JLTA Journal Vol. 22** is being printed and will be sent out soon. This volume will be uploaded onto J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>) soon after the publication.

(5) **The JLTA Journal is inviting various types of contributions** that include studies related to evaluation in a broader sense, such as classroom-based practice and program assessment that deal with issues and topics on testing and assessment.

(6) We introduced an **“Online Submission and Review System”** from the academic year 2019. This system is organized by the International Academic Publishing Co., Ltd., which JLTA has commissioned part of JLTA’s

administrative work since 2014. Within this system, all submission and review processes will be recorded online. Furthermore, to improve the *JLTA Journal’s* quality, submitted manuscripts will be checked for plagiarism using a database of published articles and for anonymity using human resources. The newly introduced system is similar to what international journals employ but may not be common to journals published in Japan. Thank you in advance for your understanding of the new online system.

#### **Submission period in 2020**

-We will accept the submissions during the period from April 7 to May 7 in the year 2020.

Please see [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=62](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62) for details.

(7) **The JLTA Training Lecturer Dispatch Project** began in 2017. The project aims to send a lecturer from the JLTA to institutions and organizations that would like to hold a training session or meeting on test development and use. In the academic Year 2019, one organization applied to the project, and other organizations were reportedly considering requesting a lecturer. The committee will renew its list of lecturers very soon. As we would like to widely publicize this

project, please feel free to convey this information to those who may be interested.

Website:

<http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

(8) Concerning **the access numbers from around the world to *JLTA Journal* articles via J-STAGE** (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>), between October 2018 and July 2019, 5202 visitors accessed the *JLTA Journal* page, and 5727 PDF files were downloaded. In the previous year, the numbers were 3913 and 3337, respectively. In short, it seems that interest in the journal is increasing. Retrievals from the U.S. are much more common than from other countries or regions, and the number of domestic Japanese users is on an upward trend. Readers from China, the U.K., France, and other countries maintained a steady interest in the *JLTA Journal*, and Vietnamese visitors entered the top 10 for the first time. This may be because the AALA conference will be held in Vietnam in October 2019.

(9) Our website has various, **useful contents for the public**, and the Web Publication Committee created or organized them. Since some contents are in English, we hope you use them to the fullest.

#### WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL Tutorial (in Japanese)

- What is a “good” test?: Validity, reliability, and practicality
- The concept of test constructs
- Test Specification
- Testing Reading-6 basic test formats-
- Testing Listening
- Testing Writing
- Testing Speaking
- Testing Vocabulary & Grammar
- Standard Errors of Measurement
- What is “Effect Size”?
- Test result reporting to enhance learning
- Classical Test Theory
- Confirmatory Factor Analysis
- Meta-Analysis
- Qualitative Methods

#### Workshop Videos

- 2014 (in Japanese)
  - Workshop 1 – Basic Concepts of CAT
  - Workshop 2 – J-CAT
- 2015
  - Workshop 1 – Introduction to Test Data Analysis (in English)
  - Workshop 2-1 – How to Develop Tests that Improve Students’ English Proficiency (in Japanese)
  - Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students’ English Proficiency (in Japanese)
- 2016 (in Japanese)
  - Workshop 1-1 – Introduction to

Effect Size: Basic Concepts and Practices (Beginning Guide)

- Workshop 1-2 – Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Theoretical Guide)
- Workshop 1-3 – Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Practical Guide)

2017 (in Japanese)

- An Analysis of Free Descriptive Questionnaire by Text Mining

2019 (in Japanese)

- Bayesian Statistics and its Application to Foreign Language Education Study
- Handouts

(10) The following were approved at the **General Business Meeting** on September 12:

1. 2018 academic year activity report (draft)
2. 2019 academic year activity plan (draft)
3. 2018 academic year settlement report (draft)
4. 2019 academic year budget (draft)
5. Revision of the constitution (draft)
6. List of officials and committee members in the 2020 and 2021 academic years (draft)
7. Reports from the committees and others including regulations of the Japan Language Testing Association Best Book Award (draft)

The revised version of the JLTA Constitution takes effect on April 1, 2020. Please see the General Business Meeting document that the Secretariat will send out.

#### (11) Other information

- Have you visited the “My Page” site (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>), where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment status? Please contact us (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>) if you need your membership number and password, which are necessary details for the login. You can access recent *JLTA Journals*, previous newsletters, and other materials specifically for members on the “My Page” site.
- If you have changes in your affiliation, address, and other information, please update your registered information on “My Page” by the end of March. We annually send student members a message asking them to submit a copy of a student certificate.
- If you have not yet paid the yearly membership fee for 2018 and 2019, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2018, you will receive no shipment or email message from JLTA and will not be able to use the “My Page” site after April 2020.

- If you plan to leave JLTA, please let us know by sending a message to [jlta-post@bunken.co.jp](mailto:jlta-post@bunken.co.jp)

**JLTA Secretary General**  
**Rie KOIZUMI (Juntendo University)**  
**JLTA Vice Secretary General**  
**Kazuhiko KATAGIRI (Senshu University)**  
**Yuichiro YOKOUCHI (Hirosaki University)**  
**Makoto FUKAZAWA**  
**(University of the Ryukyus)**

JLTA Official Twitter account:  
[@JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)  
[https://twitter.com/JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)

#### < 編集後記 >

心地よい秋風が吹き抜ける季節となりましたが、未だ台風等で被害に苦しむ地域があり、傷心のこととお察し申し上げます。一刻も早い復興を願っております。

さて、現高校2年生は大学受験のための英語民間試験の選択を迫られている時期でもあります。現場教員も受験生も保護者も混乱の中で対策を立てていると想像します。我々JLTAも専門的見地から今後のより良い受験体制の整備や実施性を考えつつ、先ずは受験生にエールを送りたいと思います。(KM)

次のような原稿を募集しておりますのでどうぞお寄せください。1) 海外学会報告, 2) 書評, 3) 研究ノート, 4) 意見, またその他当学会員の興味関心に沿うもの。



日本語テスト学会事務局  
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1  
順天堂大学さくらキャンパス  
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001(代表)  
FAX: 0476-98-1011(代表)  
e-mail: [rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp](mailto:rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp)  
URL: <http://jlta.ac>

編集： 広報委員会  
委員長 宮崎啓 (東海大学)  
副委員長 古賀功 (龍谷大学)

委員  
飯村英樹 (群馬県立女子大学)  
笠原究 (北海道教育大学旭川校)  
齋藤英敏 (茨城大学)  
長沼君主 (東海大学)